

歴史的港湾遺産の利活用

一 鞆の浦のライトアップワークショップ

日本大学 正会員 ○ 川西 崇行
日本大学 学生会員 鶴岡 智史
日本大学 正会員 伊東 孝

1. はじめに

昨年（2003年）8月9日、町おこしイベント「鞆フェスタ 2003」が地元の特設非営利活動法人「鞆まちづくり工房」によって主催され、私共の研究室はこれに協力した。「鞆フェスタ 2003」は、鞆港周辺を会場に行われた歴史的港湾遺産を活用した町おこしイベントであり、その企画・運営は地元住民団体の創意工夫によるものである。今回の内容は、ランタンづくりワークショップ・音楽祭・港湾ライトアップ・映画祭など多彩であったが、ライトアップについては過去弊研究室が培ってきたライトアップの手法を地元を引き継ぐこともその一目的としていた。ここでは、地元へのノウハウの継承に注目し、ランタンづくりワークショップと港湾ライトアップの概要を事例報告する。

2. 鞆の浦の概要

鞆の浦は広島県福山市に位置する瀬戸内海に面した歴史的な港湾であり、中世の潮待ち・風待ちの港として、また江戸期の北前船や朝鮮通信使の寄港地であったことで知られる。ここには江戸時代の港湾施設群（常夜燈、雁木、波止、焚場、船番所の所謂「5点セット」）が現存し、一部改修されて現在も漁業施設として利用されている。

3. ランタンづくりワークショップ

3-1 ワークショップのねらい

ワークショップは、鞆まちづくり工房のメンバーを中心に準備がなされ、研究室員は当日の運営に協力した。ワークショップの参加者は主に地元の子供達から募ったが、これは、子供自身やその家族が手製のランタンをライトアップ時に鑑賞できること、さらにライトアップされた幻想的な港の夜景を目にすることによって、地元の人々に歴史的港湾の新たな魅力を体感してもらうことを企図したためである。

3-2 ワークショップの内容

当日は午前10時から12時まで、鞆港近くの町内会館（江浦会館）を借りて行った。参加者は子供23名、大人9名、地元スタッフ8名であった。ワークショップは、1) 灯りについての話 2) 空き缶ランタンづくり 3) ペットボトルランタンづくりの順に進められ、参加者は空き缶ランタン・ペットボトルランタンとも各1つ作成した。

(1) 空き缶ランタンづくり

昨年研究室施行のライトアップ時に使用した形式のランタンで、空き缶など身近な材料を使い、綿ロープを灯心に菜種油を燃やし江戸時代の灯かりを再現する。今回作成したものは一部をライトアップに使用し、あとは各自に持ち帰ってもらった。

(2) ペットボトルランタンづくり

空き缶ランタンだけでなく子供たちが楽しめるようにと、地元で程近い尾道在住の灯り研究家の松岡季絵氏を講師に招き、ペットボトルを利用したランタンづくりをおこなった。ペットボトルを切断・加工して、その周囲に和紙を巻き、その和紙に子供たちが絵を描いたり、色セロファンを貼ったりと、それぞれ自由に工夫してもらった。このランタンの光源は洋蠟燭を用いた（図-1）。

4. ライトアップ

4-1 ライトアップ準備

事前準備として警察・消防・県港湾局・市役所及び地元町内会等、関係諸機関への届出を要する。また、火



図-1 ワークショップの様子と作製したランタン

キーワード 鞆の浦 港湾遺産 利活用 ワークショップ 町おこし イベント

連絡先 〒274-8501 千葉県船橋市習志野台7-24-1 電話 047-469-5572 FAX047-469-2581

気を使用するため周辺住民には別途回覧板などでの周知も行った。また、ランタンを設置する場所については、地元住民が清掃や草刈りを行い、前夜には、昨年みられた設置場所付近の路上駐車避けるため、簡易な車止めを設置した。

4-2 使用したランタン：水上ランタンの登場

今回のライトアップに使用したランタンは、前述の2種類のランタンに加え別途水上ランタンを用意した。用意したランタンの総数は、空き缶ランタンが約200個、ペットボトルランタンが23個、水上ランタンは40組である。

水上ランタンは、地元住民の発案によって今年新たに作られたランタンである。ペットボトルを用い、光源には背の低い洋蠟燭を用いた。

4-3 常夜燈のライトアップ

港湾遺産のひとつである常夜燈だが、往事は港湾の目印・灯台の機能を果たしてきた。そこで今回も常夜燈の象徴性を強調するため、外側からライトアップして常夜燈を照らし出した(図-2)。また常夜燈の基壇周囲に、ワークショップで作成したペットボトルランタンを設置

4-4 ランタンの配置(並べ方)

ランタンの配置に関しては、昨年の研究室実施回で求められたランタンの間隔2.5mに従って並べられた。大波止では一列、大雁木・北雁木・東雁木では千鳥配置(図-3)にした。千鳥配置にすることで少ない数のランタンでも光の帯の幅が広がって全体的に明るく見え、演出効果を高めることができる。また、大雁木から北雁木にかけては水上ランタンを浮かべた。

今回水上ランタンを用いたことによって、鵜港の特徴である円形の港湾をいかしたランタンの設置になった(図-4)。

4-5 ライトアップの演出

薄暮となった午後7時頃に点灯を開始し、まず常夜燈の点灯を合図として大波止の先端部分から付け根に向

かって、次に大雁木・北雁木・東雁木及び常夜燈周囲※(※ペットボトルランタン)に点火し、大雁木から北雁木へ向け点火しながら水上ランタンを浮かべた。

従来、水際にランタンの設置しがたかった大雁木と北雁木との間の水面にランタンを浮かべたことによって、1)明かりの配置が適切になった 2)水上ランタンは点火して後対岸へ順次引き寄せたので、灯りの移動が効果的な演出方法になったが、残念なことに途中で火が消えたものもあった。これは上方向からの強風が原因であると考えられる(図-5)。

5. おわりに

今年の港湾ライトアップは、昨年、弊研究室が行ったライトアップに触発された地元住民の「自分たちの手で鵜港の幻想的な空間をつくりだしたい」という思いから実施された。今回は経験的な蓄積のある私共の研究室が協力したが、来年からは完全に地元独力でライトアップを実施する方針である。昨年課題とされた「地域の魅力づくりのしかけ」が、定着に向けて一歩前進したといえる。

また、今回ワークショップで新たに製作された子供達手製のペットボトルランタンは、子供達とその家族はもとより地元住民から概ね好評だった。参加者の家族からは「綺麗なランタンをありがとう」「子供による経験となった」という声もいくつか寄せられ、また「住民の新たなまちおこしの取り組み」として、地元新聞でも報道され、住民の意識を喚起するという当初の企画はある程度満たされたと言えよう。



図-2 常夜燈のライトアップ



図-3 雁木のランタンの配置



図-4 ランタンの配置場所



図-5 水上ランタンの様子